

堺自然ふれあいの森

ニュースレター 第13号

発行：平成10年10月9日 TSOグループ(指定管理者)

4月2日開園記念イベント



堺

自然ふれあいの森が、2006年4月2日に開園しました。堺自然ふれあいの森(以下、ふれあいの森)は、堺市が2001年より市民委員と共に整備を進めてきた里山公園です。

開園初日には、いっちゃんクラブ(ふれあいの森のボランティア組織)が中心となって企画した記念イベントが行われました。

イベントは2部構成で、第1部の開園式には、これまでふれあいの森の開設に携わってきた堺市・増田教授(大阪府立大学)・いっちゃんクラブ、そして4月から指定管理者として

「森の館」に常駐するTSOグループが出席しました。第2部は、雨のため予定が一部変更されましたが、応募者の中から抽選で選ばれた市民の皆さんが、椎茸菌打ち体験やクラフト教室などに参加しました。お昼には、ふれあいの森で収穫された野菜入りの豚汁がふるまわれるなど、大いに賑わいました。

●第1部●



指定管理者代表のあいさつ



カスミザクラの記念植樹

●第2部●



温かい豚汁に
心も体も ぽっこり



クラフト教室で賑わう森の館



椎茸菌打ち体験



ふれあいの森を支える人々

イベント報告～こんなコトしました!～

田植え体験～田んぼふれあい隊～

ふれあいの森は、周辺環境との連続性を踏まえた「里山の保全」を目標に、自然環境の保護・活用・復元を図っています。

里山の営みや風景を復元するため、田を耕し、《人と人》《人と自然》がふれあうきっかけとして、いっちゃんクラブ指導のもと、田植え体験のイベントを行いました。幼児から年配の方まで、一緒にあって心地よい汗を流しました。



ネザサでパンを焼こう!



長く放棄されていた里山であるふれあいの森では、ネザサと呼ばれる笹が繁茂し、他の動植物の生息地を奪っています。そこで、楽しみながらネザサを退治するイベントを行いました。ネザサを刈り、それにパン生地を巻きつけて焼きました。自分たちで焼いたふわふわのパンを皆で美味しく頂きました。

団体の受け入れ

ふれあいの森の認知度が上がるにつれ、学校や青少年育成等の団体利用が増えてきています。今後も総合学習や遠足・研修に役立つ様々なプログラムを充実させていきます。



開園から半年を向かえて… 対談

いっちゃんクラブ代表の福田さんと、チーフレンジャーとしてふれあいの森に常駐している指定管理者の後藤さんにお話を伺います。

■半年経っての感想をお聞かせ下さい。



福田：事故もなく夏休みが終わり、これから問題箇所の対応が大事ですね。開園してから自分達の活動に追われていて、なかなか一般向けの対応が充実できていなかったの、これからやっていきたいと思っています。やっと動き出したという感じですね。これから期待して欲しいです。それと、前もって指定管理者とも十分に連絡を取り合うようにしたいですね。

後藤：様々な業務に対応している間に、落ち着きなく半年が過ぎたという感じです。ジレンマというか焦りも感じています。ですが、イベントの開催や団体の受け入れ、園内の整備など色々な事が形になりつつあるとも実感しています。あと、いっちゃんクラブの会員ともしっかりと色々な事で会話できれば良かったと思っています。

福田：会員には私も何が得意か知らない人がいっぱいいます。一緒に作業をしながら話をするのが、一番だと思っています。

■「こんな森にしていきたい！」という全体像はありますか？

福田：全体像としては、基本計画などで活用・保護・回復の3ゾーンに区分され、それらの利用の仕方が検討されています。それを立体的にどのような中身の樹林にすればよいかを検討するため、樹林構造が分かる「全体植生図」を作り、この7月にいっちゃんクラブの樹林整備方針が決まりました。8月の全体活動から取り組んでいる、かがみ池の奥のコナラ林の更新もその一つです。今後は全体植生図に基づいた方針で森の整備ができればと思っています。

後藤：そうですね。かがみ池の辺りは手を入れやすいですし、いい場所になると思います。保護ゾーンは自然遷移に任せつつ、必要に応じて手を入れる程度に抑え、活用ゾーンはフルに手を入れる形で保全を計りたいと思っています。ただし、「手を入れる」というのは実作業だけを指すのではなく、一度、下草刈りをしたら3年は置くとか、ツツジの花を咲

かせたいなら光が入る空間を前年の夏に作るなど、計画的に管理をするということです。

福田：そうですね。保護ゾーンだからと放置するのではなく、森が荒れないように樹林の管理が必要だと思っています。

後藤：放置しているようでも、こちらでちゃんと把握し徹重に保全している区域と、活用しつつ保全を図るところ、なおかつ来園者が安全に楽しめる場所に区別して、管理したいですね。

福田：全て同じレベルで整備する必要はないと思っています。手法もいろいろ考えながらやって。

後藤：様々な環境というか、樹木を透いたところ、萌芽している木があるところや遷移過程が見られるなど、均一な様相でなくこの森全体として多様性がある、樹の年齢や樹冠部の空間の差など、変化が混在する森にしたいと考えています。それから、生きものと共存できているというか、彼らの気配を感じ取れる森にしたいですね。来園者もその存在を意識していて、人と野生生物がうまく住み分けしている。その様な場所にしたいと思っています。

■この森の10年後を見据えて、どのように活動していきたいですか？

福田：昔の里山のような景観が再生できていければと思います。かつては、樹林の間伐・すそがり・柴刈り・下草刈りは生活上、農作業上必要があってやったことでしょ。今はその様な利用が少なく、ネザサを刈っただけでどうしようか、というのが問題になってきています。これからは、森の中で循環できるような利用法を考え、実践した里山作りを目指したいです。そしたらもっと色々な環境ができて動植物も増えてくると思います。

後藤：そうですね。

福田：私の場合は子どもの頃は山でばかり遊んでいて、なんでも自分で作っていたので、そういうのもやっていきたいです。小中学生もたくさん来て欲しいですね。いっちゃんクラブもチームを組んで手伝います。やっぱり「子ども達に何か伝えなければ」と思えば前もって準備するし勉強にもなります。案内する人も一部の人だけでなく、皆でやっ

ていきたいとすごく思っています。

後藤：いい意味で皆さんの意識も変わってきますね。

福田：変わるとは思いますよ。

後藤：指定管理者としては、方針を決めて、単に里山保全だけを行うのではなく、環境教育の視点で自然のことや、人と自然との関わりを伝えていきたいと思っています。市民の方が気軽に来て、ほっとできる場所にもしたいですね。また、いっちゃんクラブと良い緊張感を持って、一緒に多様性のある森を作っていきたいと考えています。

福田：一体じゃなくて、指定管理者といっちゃんクラブが両方で動いていかないとね。

後藤：でも、何をしているのが見えているというか、仲の良い隣同士のような関係になればと思っています。現在の里山保全は里（地域）と里山（森）の繋がりが無くなりつつある中で行なわれています。市民の理解を得られなければ保全は継続できません。今後はいっちゃんクラブのような市民参加が重要な意味を持ててきます。里山景観を維持していることの重要性を伝えたり、市民参加の場の提供やそれに関わる情報の発信を行っていききたいと思っています。

■来園者に気を付けてもらいたい事は？

福田：ルールは守って欲しいし、違反を見かけたら説明して、やめてもらうようにしています。

後藤：マナーですね。人に対して、森に対して。「自然の森」と言っても、所有者のいない土地はありません。そういう意識を持って欲しい。虫や草花も計画的な維持管理の

結果として、生息しています。不本意ですが、動植物の採取など利用マナーが悪いと、様々な措置をとる必要が出てきます。

■いっちゃんクラブに入会を希望される方へのメッセージをお願いします。

福田：なんにでも興味持ってくれる人。それから、他の人と力を合わせてやっていこうっていう人に入ってほしいですね。放置された里山を公園として整備し、皆がふれあえる森をつくり、伝えたいという思いで活動しています。自分だけで楽しむのもいいけれど、仲間と一緒に達成感を味わうのも楽しいですよ。あと、色々な世代の人に入って欲しいです。高校生とかも入ると活動の幅が広がって面白いと思っています。

後藤：ふれあいの森にとっても、世代に関わらず何でも関心をもてる人が入ってくれるのは良いことですね。

■市民の方に向けてのメッセージをお願いします。

福田：いっちゃんクラブも来年は色々なイベントを考えて早くから募集をかけますので、市民の皆さん、一度は「自然ふれあいの森」に来て下さい。

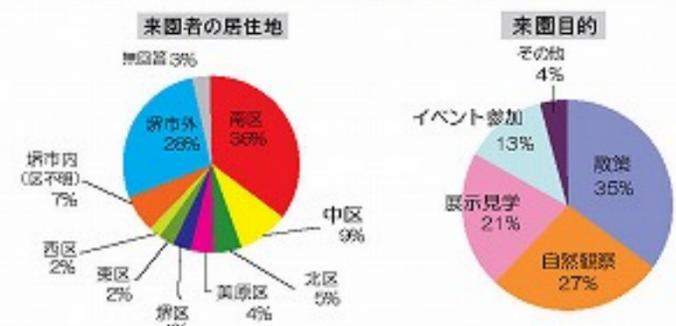
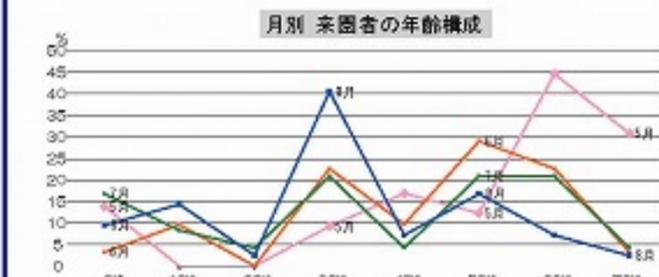
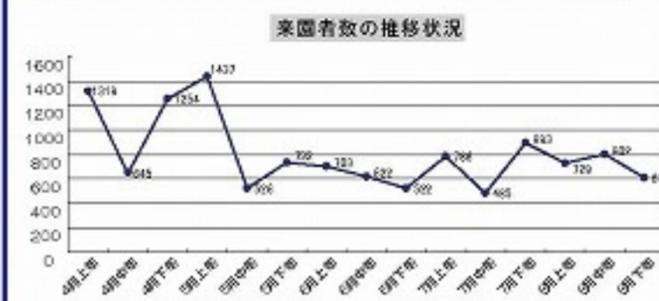
後藤：ほっとできて、何か発見がある森、皆さんが大切にしたいと思える森を目指します。

是非、お越し下さい。



これまでの利用状況

開園から8月までの来園者数は12,065人でした。



来園者数は、開園直後の春休みとゴールデンウィークの伸びが大きく、その後は月平均2000人強で推移しています。内訳としては、ふれあいの森がある市内南区の利用者が最も多くなっています。年齢構成は、6月以降30代の比率が高まっていますが、これは家族連れでの利用が増えているためと思われます。散策や動植物の観察などを通して、自然とのふれあいを家族や友人と楽しんでいます。

※ 来園者数は、自動カウンタにて計測
※ 来園者の居住地・年齢構成・来園目的は5~8月のアンケート結果に基づく(アンケート総数165件)

コラム 「これからの里山教育に求められるもの」

TSDグループ／生態計画研究所 所長 小河原孝生

コナラの葉が色づき始めた昨秋、34年ぶりにシリブカガシの林を見て、感動を新たにしました。すらりとした樹形、こんもりと重なる葉を通した木漏れ日……。でも、少し不思議に思いました。1970年代、ここには、こんな森があったのだろうか？

71年12月、美木多の美多弥神社には、確かにシリブカガシの森がありました。この森が泉北ニュータウンの造成によって消えようとした時、当時の自然保護団体の運動によって、その一部が残されることになりました。しかし、泉北丘陵一帯は人の手が入らなくなり、尾根筋は背の低いアカマツにモチツツジやコバノミツバツツジが咲きそろそろ見晴らしの良い藪山でした。ニュータウンの周辺緑地を大阪府立大学造園学研究室の皆さんと調査した時、確認された鳥類は年間94種類。キビタキは奥山の鳥でした。

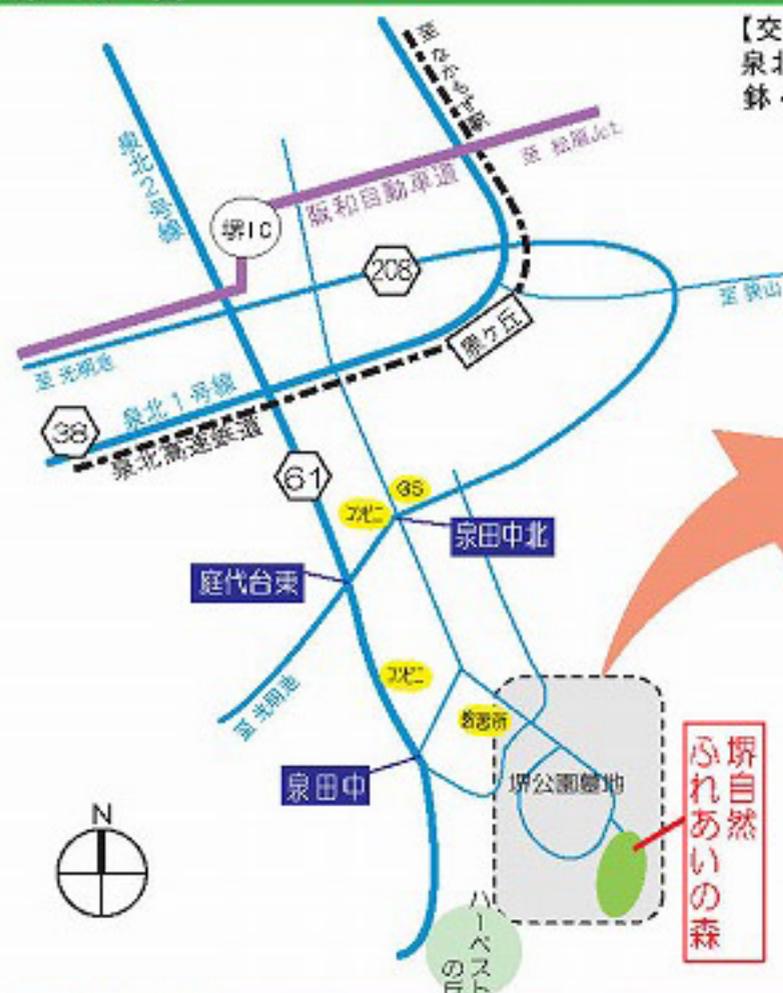
それから35年。里山の経済価値が無くなり、木を伐らない自然保護が続いた結果などにより、樹木は高く育ちました。しかし、森はアカマツからコナラに替わり、樹冠は鬱蒼と覆われ、林床はササとシダが密生し、モチツツジも咲かなくなっていました。そのため、堺市では開園に先立ち、01年より大阪府立大学と共に市民参加による里山の保全活動を促進し、「いっちゃんクラブ」は、ふれあいの森の管理活動をボランティアとして担ってきました。

一方、4月の開園以来、市民に開かれた公園として既に1万2千人以上(8月末現在)の方々が利用され、適正な利用を促すためにも、「里山の持つ意味」を伝える教育活動の必要性が大きくなっています。それは、目の前にあるモノや出来事だけの説明(現象の追認)に終わるのではなく、これまで述べてきたように、その背景にある時間的・空間的なつながりを解説する(自然の遷移と生態系の仕組みを発見し自然的・社会的な意味を伝える)活動に他なりません。そして、これからの里山教育には、幅広い市民による保全・教育活動への参画・協働を通して、里山との関わりを深め、里山の持つ意味を生活の中に活かすために、自然と共生する地域づくりにつながる体験学習のプログラムが必要とされています。

私たちTSDグループは、堺自然ふれあいの森の指定管理者として、このようなプログラム開発と実践を通して、市民主体の保全・教育活動を支援していきたいと願っています。



案内図



【交通案内】

泉北高速鉄道「泉ヶ丘」駅 南側2番のりば(南海バス)
鉢ヶ峯行き「公園墓地北口」下車 徒歩約15分
※日曜・祝日は、堺公園墓地(直行)便有り
「堺市立霊堂前」下車 徒歩約5分



問い合わせ先

堺自然ふれあいの森 森の館 TSDグループ(指定管理者)

〒590-0124 堺市南区畑1740番地

TEL: 072-290-0800 FAX: 072-290-0811

ホームページ: <http://www.sakai-fureainomori.jp>